

「尾木ママ」の愛称で知られる教育評論家の尾木直樹さんと、本誌編集委員でマンガ家の石坂啓さん。子育てや教育問題などで意気投合し、以前から親しいお二人が、東日本大震災後のこの国のゆくえをタブラーなく語った対談。そのほんの一部を紹介する。

石坂 実は、尾木先生が「尾木ママ」と呼ばれているのを、最近まで知りませんでした。

尾木 つきあいは一〇年くらいになるのね。まさか、ぼくのこと、ほんもののおネエだと思っただけだったですよ？

石坂 そうは思っていないんですけど、もちろん。でもあえて言いますが、おネエ系の一枠か二枠の場所、なんとかこれをキープしてほしいです。なぜかというと、おネエ系を嫌いな差別主義者たちの血圧が上がるだろうという一点に集約されます。

わかりやすい代表でいえば、やはり石原慎太郎さん。彼の差別的な発言がまかり通るのは、この国の多数が口にはできないけど、うすうす思っていることをスバズバ言ってしまうからですが、はたして公人としてそれを言っているのかどうかについてはだれも検証していない。

「よく言ってくれた」という支持層がいる、そうしたことがわかっていて、石原さんは強気で言うわけですが、ま

実はいまファンクラブまであるのよ



ぜひ私も入れてください(笑)

尾木ママ、大震災後をどう生きる？

石坂啓 対談 尾木直樹

おぎ なおき／1947年滋賀県生まれ。教育評論家、臨床教育研究所「虹」所長。法政大学教授、早稲田大学大学院客員教授。バラエティ番組などにも出演し、愛称は「尾木ママ」。著書多数。近著は、「尾木ママの共感♡子育てアドバイス」(中央法規)。

いしざか けい／1956年愛知県生まれ。マンガ家。本誌編集委員。代表作に『安穩族』『キスより簡単』『I'm home』などの作品。『赤ちゃんが来た』『お金の思ひ出』などエッセイも定評がある。

ずそういう人たちはたとえ女が嫌い、オバサンが嫌い、障がい者が嫌い、貧乏人が嫌い、ゲイも嫌い。つまりは、マイノリティや社会的弱者といわれる人は全部嫌い、なわけです。たいへんわかりやすい(笑)。

マジノの橋下氏批判に喝采

尾木 教育学的にいうと、どうしたらああいう人が育つのかっていう興味があります。二〇一一年の夏に大阪府知事(当時)の橋下徹さんが代表を務める「大阪維新の会」が、国旗の掲揚と君が代の斉唱を公立学校の教員に義務づけるという府の条例を提案して、それが議会を通ったんですよ。罰則規定もつくろうとしていたんです。

そんな大阪での「規制」が話題になっていたところ、映画監督の井筒和幸さんとのかけ合いの中でマツコ・デラックスさんが、「大阪で独立していただいて、そこで封建政治をしていただけば」といった内容の発言をされていたんです。

石坂 テレビで、ですか？

尾木 いや、ラジオです。ぼくが出演している文化放送の「夕やけ寺ちゃん活動中」という番組で、「井筒とマツコ禁断のラジオ」というコーナーがあって、その発言をスタジオで聞いていて、「うわー」ってびびくり、思わず拍手しちゃいました。

石坂 喝采ですね、それは。「全然へっちゃらよ。あんたたち、勝手にやりなさいよ」という堂々たるかみつき方。**尾木** 実はぼく、その少し前に橋下さんが君が代問題で発言したときに、「と

視点から、独立していただいてもかまいません、みたいなことを言ったの。すごいでしょう。

石坂 政治家や評論家が威張りながらもそんな反論を言うのとは違って、マツコさんのキャラ、マツコさんの口調で言うから威力があると、尾木先生もおっしゃるのでしょうか。

本のおとなたちが自分たちをどうさせようとしてきたか、よく見ているんですね。そして、その流れに自分がどう関わっているのか、また、関わっていかべきかを、冷静に見ています。

大震災以降、若者たちに変化

尾木 大震災以降、子どもたちや大学生はずいぶん変わりましたね。

石坂 そうですか？

尾木 いい意味で変わりましたよ。前から若い人たちは変化していたのでしようが、このトシになるまではつきりとは気がつかなかったです。

石坂 それは(尾木先生も行かれた)被災地に限った変化ではない、ということですか？

尾木 そうです。被災地限定ではなく、大震災以降の変化ということですよ。それはたとえば、同志社大学や立命館大学などの関西の大学や、九州の大学に行っている学生の前に立つても感じました。

石坂 どういうふうな変化ですか？

尾木 自分が生きるとい意味を、これまで成果主義の世界で、数値目標を掲げて競わされてきましたよね。そこにいるいろいろな批判があるとしてもそこに入らざるをえない、という思いを若者はみんな持っていたわけですよ。それが根底から、強制的に覆された。そこへ持ってきて就職難の状況がある。そういうなかで、若い人たちは、日

尾木 新自由主義的な傾向が大震災でほとんど崩壊しました。「がんばればなんとかなる」というのは幻想だったことにみんなが気づき、過度な期待感がなくなってきたのです。

犠牲者は、亡くなった方と行方不明者をあわせると約二十万人にもなりますが、これだけの犠牲のもと、自分たちはどう生きていけばいいのか、どうやって日本を再興していくのか、みんな自分の人生と重ね合わせて、本気で考えていますよ。

石坂 若い人たちは真剣に考えているわけですね、社会状況というか、日本のなかで自分たちのおかれた状況を、ちゃんと見ている。

尾木 だから、チャラチャラしているところがない。ぼくが講演などで「生き方において、二万人の命をどう引き受けていくのか、つないでいくのか」ということが問われているんだよ」というと、まるで砂に水が染みこむように理解してくれるようになりました。

石坂 いいですね。それじゃあ、そういう人たちが期待を抱かなくなったというのは、決して悲観的になっ

という意味ではないですね。厳しい、深刻な現実を踏まえたいうでの期待になったわけでしょうから。

尾木 自分たちの責務というか、責任感とか歴史的な使命みたいなもの。これまでの「ゆとり世代の若い者はダメだ」という、あのバッシングのなかでいじけているみたいな雰囲気は少なくなりましたね。「そう言ったって、あんたたち、何もできてないじゃん。原発の事後処理もできないじゃん」と言いますよ。おとなが、国が、政治家が、どれほどのいたらくかを見てきているのですから。

石坂 そうですね。おとなたちは子どもたちにいろいろなことを見透かされているけど、その自覚はないでしょう。尾木 学生たちは、「日本の再興なくして自分たちの人生はない」と思っています。だから、四年の就活(就職活動)の大事な時期に、それどころじゃないだろうと思ひ、被災地にとんだ学生もいます。そういう考えの若者も出てきたということが、とても重要な現象ですね。

※本対談は、弊社より近日発売予定の単行本『尾木ママと考える 大震災後の希望のヒント』の一部を再構成したものです。

二〇一一年六月、東京・吉祥寺にて。
撮影／編集部